

今までの水流実態解明プロジェクトでわかったこと。

【資料】 多摩川の歴史的変遷

多摩川流域を地域特性と流域の特徴から、『森林』、『湧水・崖線（浅層地下水）』、『用水路』、『深層地下水（地盤沈下）』、『本川』、『支川』の6つに分け、それぞれの流域における過去から現在までの移り変わりをまとめました。（地図の分類名をクリックすると、説明にジャンプします。）



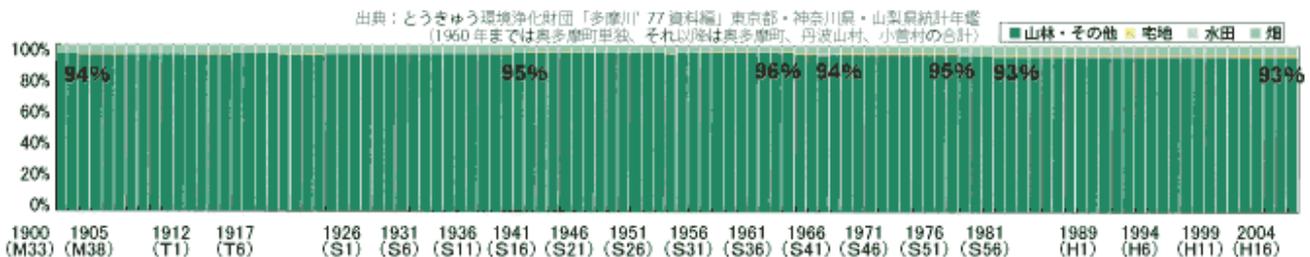
森林

多摩川源流域の森林面積は、過去からほとんど減少していません。

後継者不足による林業に従事する人口の減少やそれに伴う管理の不十分、シカの食害による森林被害などにより、森林の荒廃が問題となっています。

多摩川の源流域面積に占める森林の割合

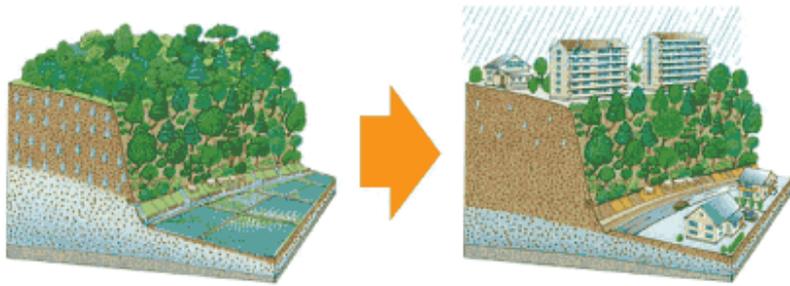
多摩川源流域の森林面積の割合は、2004年で93%であり、過去から通じてほとんど変化していない。宅地面積は1.4%程度である。



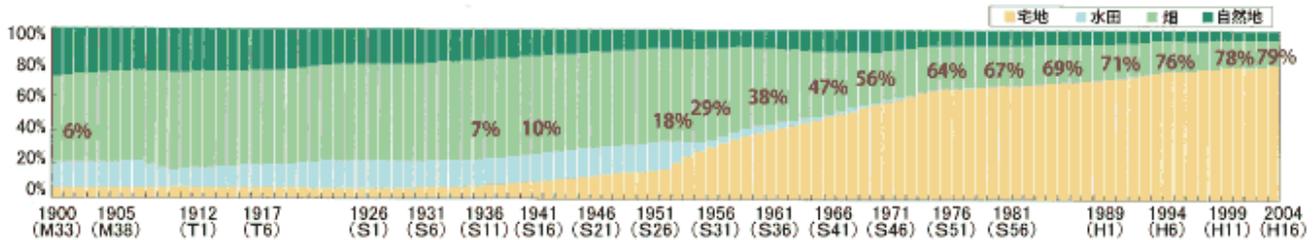
湧水・崖線(浅層地下水)

多摩川中流部には、国分寺崖線や多摩川丘陵によって、数多くの湧水が存在しています。

かつては豊富な湧水量が確保されていましたが、市街化の進展に伴い、湧水の涸渇や湧水量の減少が見られます。



多摩川中流部（国分寺崖線）の土地利用変化



用水路

多摩川中下流域には、かつては水田や畑などの農耕地が広がり、そのための農業用水路が張り巡らされていました。

戦後の都市化の進展で、多くの農地が市街地になり、水路の必要性が薄らぎました。生活雑排水などの排水路としてのみ使われることも多く、埋め立てられたり蓋をかけられたりしています。

近年では、環境用水や防災用水としての役割も見直されてきています。

深層地下水(地盤沈下)

多摩川下流域では、昭和初期の京浜工業地帯形成以後、工業用水源として大量の深層地下水を汲み上げたため、地下水位の低下や地盤沈下が発生し社会問題となっていました。

その後、揚水量が大幅に減少され、地下水位の低下や地盤沈下は現在おさまっています。

近年では、流域の開発による地下水涵養量の減少や、許可を伴わない局所的な小規模取水の増加による地盤沈下が懸念されています。

本川

源流域、下流域(汽水域)

源流域は森林からの清流により水量は豊富であり、水質も良好です。

下流域(汽水域)は感潮区間であり、水量は非常に豊富です。水質は下水道整備がほぼ完成していることから改善傾向を示しています。

上流域、中流域、下流域(順流域)

羽村堰での取水量の増加に伴って河川流量は減少しました。中流域からは下水処理場の放流水に依存しており、本川流量の約半分が処理水となっています。

水質は高度成長期に生活雑排水が流入し悪化しましたが、下水道整備の進展により改善されています。

■ 多摩川中流域 河川流量・水質の歴史的変遷のイメージ



支川

秋川・平井川

流域のほとんどが森林で覆われており、過去から現在にわたって水量は豊富です。また、水質も良好です。

浅川

上流域は、森林からの清流成分水量が多くなっています。下流域での水量は下水処理場の放流水に依存しています。水質は近年の下水道整備の進展により改善されてきています。

残堀川

中流部から下流部にかけては水の無い区間(瀬切れ)が大半を占め、水量は非常に少なくなっています。このため水質が悪い区間がありますが、下流部での昭和用水流入による水量の増加や下水道整備の進展により改善されています。

野川・仙川

野川は水量が乏しく、水が無い区間(瀬切れ)があります。水質は下水道整備の進展により、改善されています。
仙川においても上流部から中流部にかけて水が無い区間がありますが、中流部にある下水処理場からの放流水により、野川に比べて水量は安定しています。

